

重症急性呼吸器症候群(SARS)とカルロ・ウルバニ(Ⅱ)  
～NHKスペシャル“SARSと闘った男”がのこしたもの～

朝尾 直介

Severe Acute Respiratory Syndrome (SARS)  
and Carlo Urbani (Ⅱ)

– What the NHK special "Man who fought against SARS" left behind –

ASAO Naosuke

神戸医療福祉大学紀要 第22巻 第1号

(令和3年12月)



<総説>

重症急性呼吸器症候群 (SARS) とカルロ・ウルバニ (II)  
～NHK スペシャル “SARS と闘った男” がのこしたもの～

朝尾 直介

Severe Acute Respiratory Syndrome (SARS) and Carlo Urbani (II)  
-What the NHK special "Man who fought against SARS" left behind-

ASAO Naosuke

After the death of Dr. Carlo Urbani, who contributed significantly to the containment of SARS, NHK documentary "Man who fought against SARS" was aired. The documentary film depicts his anguish about traveling to Thailand, which could spread the infection across national borders. In this review, what this documentary film has left behind is discussed.

**Key words** : Severe Acute Respiratory Syndrome (SARS) , Carlo Urbani  
Coronavirus, NHK documentary, "Man who fought against SARS"  
重症急性呼吸器症候群 (SARS)、カルロ・ウルバニ、コロナウイルス  
NHK スペシャル、“SARS と闘った男”

1. はじめに

2019年末に端を発し世界的流行（パンデミック）となった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行は、2021年8月現在も収まることなく、国内で累計およそ150万人の患者と1万6000人の死亡者が報告され<sup>1)</sup>、新型インフルエンザ等特措法に基づく緊急事態宣言が20を超える都道府県に発令されている<sup>2)</sup>。

私は前稿で、COVID-19など新たな感染症への対策を考えるにあたり、これまでの感染症流行の歴史をふり返り、とられた対応とその効果などについて検証することの重要性とともに、2003年の重症急性呼吸器症候群 (SARS) の流行と、その封じ込めに大き

く貢献したイタリア人医師カルロ・ウルバニについて記載した<sup>3)</sup>。新規の感染症であったSARSを早期の段階で封じ込めることに成功したことは、感染症対策の歴史上においても極めて重要なできごとであった。

ウルバニ医師の死後、彼の母国イタリアでは、カルロ・ウルバニ協会が設立され、SARS封じ込めへの大きな貢献やノーベル平和賞を受賞した国境なき医師団での活躍などについて、彼は今も英雄としてたたえられているようである<sup>4)</sup>。しかし残念なことに、その大きな功績にもかかわらず、我が国やSARS封じ込めの舞台となったベトナムにおいては、現在ウルバニ医師の名を知る者は少ない。私は昨年から教員として学生らに感染症対策などを含む講義をする機会をいた

だき、ベトナムからの留学生が大半を占めるクラスも受け持たせていただいている。学生らは SARS 流行の数年前の2000年ごろに出生した世代であり、講義の一環として SARS とウルバニ医師についても取り上げるが、学生らの SARS やウルバニ医師についての知名度は驚くほど低い。私は、このことが単に時間の経過にともなう忘却によるものだけではないと考えている。

ウルバニ医師が亡くなった翌年の2004年に、ウルバニ医師の SARS との闘いと苦悩を描いたドキュメンタリー「NHK スペシャル「SARS と闘った男～医師ウルバニ27日間の記録～」」<sup>5)</sup> が放映され、NHK スペシャルセレクションとして「世界を救った医師～SARS と闘い死んだカルロ・ウルバニの27日間～」<sup>6)</sup> が出版された。



(写真) NHK：「SARS と闘った男～医師ウルバニ27日間の記録～」のタイトル (左)  
NHK 出版：「世界を救った医師」の表紙 (右)

私は、この番組の制作がウルバニ医師に対して、いわれなき影を落としてしまい、そのことが大きく影響したのではないかと考えている。

本稿では、感染症対策のあり方そのものから少し寄り道をして、当時 WHO ベトナム事務所勤務していた当事者の1人として、このドキュメンタリーがのこしたものについて考察する。

## 2. 自らのへ感染

ウルバニ医師は、ベトナムのハノイ市内の病院でのアウトブレイクに遭遇し、詳細な観察により新規の感染症であることを感知し、患者検体を日本と米国の検査機関に送付して新規の病原ウイルス (SARS-CoV) の発見につなげるとともに、WHO を通じて世界的警鐘 (グローバルアラート) を発出することなどで、SARS の早い段階での封じ込めに大きく貢献した<sup>7) 8)</sup>。しかし、結果的には自らも SARS に感染し、タイへと渡航してバンコクの病院で入院した。

入院から数日して、ウルバニ医師の容態は悪化し呼吸管理に気管切開を要する状態となった。気管切開はエアロゾルが発生する処置であるため医療スタッフへの感染リスクは極めて高くなる。このため医療スタッフはより高性能の防護具を必要としたが、病院には十分な装備はなかった。当時、JICA 国際緊急援助隊専門家チーム (第1陣) が、マスク、手袋、感染防護具 (PPE)、消毒薬、人工呼吸器などの機材を携えてベトナムの WHO 事務所を訪れていた<sup>9) 10) 11)</sup>。3月20日、WHO は日本政府から JICA 専門家チームを通じて高性能の防護スーツを供与され<sup>9)</sup>。WHO ベトナム事務所の唯一の日本人スタッフであった私は、日本から供与されたスーツをウルバニ医師の入院するタイの病院へ届けた。ウルバニ医師の入院していた病室はガラスで遮られていたが、インターホンで少しだけウルバニ医師に話かけることができた。タイの病院でウルバニ医師と面会することのできた WHO ベトナム事務所のスタッフは結局私一人だけであった。その後、ウルバニ医師は回復することなく、3月29日に還らぬ人となった。

### 3. NHK スペシャル“SARSと闘った男”

SARSは、アジアやカナダを中心に感染拡大したものの3月12日に発出されたグローバルアラートが功を奏し、WHOは7月5日に終息を宣言した<sup>12)</sup>。

その後、9月にWHOでの任務を終えて、ベトナムのハノイから帰国したばかりの私のところに、ウルバニ医師を主人公にした特集番組の企画がNHKのプロデューサーから持ち込まれた。当初の企画の内容は、私が旅人となってウルバニ医師の足跡をたどっていくというものであった。これは、私がWHOベトナム事務所の同僚であっただけでなく、日本政府からWHOへ供与された防護スーツをタイに届けたという記録がプロデューサーの目に留まったためであった。さらに、ウルバニ医師と同様に途上国でのマラリアなどの感染症対策にかかわってきたことも関係していたのかもしれない。

プロデューサーは、企画段階での打ち合わせを持ち帰った後しばらくして、企画が通り番組作成が本格的に始まった。取材の中で、病室でのガラス越しのウルバニ医師との会話について話が及んだ時に、プロデューサーから、「ここが重要なポイントなのです。なんとかして何を話したのか思い出してください。」というような聞き取りがあった。この時、私が実際に見聞きしたものとは別に、ウルバニ医師についてすでに構成されたストーリーが別に存在しているような強い違和感を覚えた。そして、それ以降、私が取材を受けることはなくなり、私がこのプロデューサーと直接話をしたのはこの時が最後となった。

### 4. ドキュメンタリーがのこしたもの

自身もドキュメンタリー番組をプロデュース

スする文教大学の竹林紀雄氏は、IT News Letterに「テレビ・ドキュメンタリーは何を“描く”のか」<sup>13)</sup>を寄稿している。その中で、私見としながらも、ドキュメンタリーとは、“人が人を描く”ものであり、「伝える」ではなく「描く」ということにドキュメンタリーの本質があるとしている。そして、ドキュメンタリー番組では何を描くのかを一言で言い切れれば、「今を生きる人間の葛藤」であり、その対象となる生身の人物が抱える葛藤に、どれだけ迫ることができたのか、葛藤に迫れば迫るほど観る者の心をより響かせることができるということだと述べている<sup>13)</sup>。まさに、作り手の立場から「ドキュメンタリー」とはどういうものかを表現している。

ウルバニ医師にスポットを当てたこのドキュメンタリーのテーマは、まさにウルバニ医師の葛藤を描くことだったのだろう。取材班は、自らが国境を越えて感染をひろげてしまうおそれのあったウルバニ医師の渡航について、WHOの意に逆らって独断で渡航したようなように表現している。ウルバニ医師はすでに亡くなってしまい、本人の本当の思いは慮るしかない。ただ、関係者の1人として言及できる事実を記載しておくとするれば、ウルバニ医師が入院していた病院に届けた防護スーツは、日本政府からWHOが公的に譲り受けたものであったし、当時秘密裏ではあったものの、私のベトナムからタイへの渡航はWHO職員としての公務であり、その記録は当時私が所持していた国連パスポート（United Nations Laissez-passer：UNLP）に記されていた。そして、これらWHOの一連の任務は、まさに、ウルバニ医師の治療に一縷の望みをかけることだけを目的に遂行されたものであった。彼を知りうる全てのWHOスタッフにとって彼は間違いなく英雄であったし、皆がその回復に希望をつないでいた。

WHO といっても、様々な国籍や人種や性別など多種多様な属性や背景を持つ人々の集合体である。また、WHO 本部、西太平洋地域事務局、ベトナム事務所、それぞれのレベルでの立場や状況は異なる。ウルバニ医師の抱えていた葛藤は、言い換えれば、WHO という組織全体の葛藤であったのかもしれない。そして、NHK の取材班はそこに土足で踏み入ったのかも知れない。このドキュメンタリーと取材陣は、日本の放送業界で最も権威ある賞とされる放送文化基金賞（第30回）を受賞した<sup>14</sup> が、その代償にウルバニ医師にいわれなき影を落としてしまったように思われる。

ドキュメンタリーというと、どうしてもドラマティックな描きかたになるところもあるのだろう。しかし、本当のところはどうだったのか、別の観点からはどうとらえられていたのかなど、製作されてから時間がたった後からでも、検証が必要なのではないだろうか。SARS 封じ込めに大きな役割を果たし、感染症対策の歴史上でも重要な人物と考えられるカルロ・ウルバニ医師を描いた、NHK スペシャル“SARS と闘った男～医師ウルバニ27日間の記録～”についても、時間が経過した今だからこそより詳細な検証を加えるとともに、改めてその功績をより忠実に残していくことが重要であると考えている。

## 参考文献

- 1) 厚生労働省：新型コロナウイルス感染症について 国内の発生状況  
[https://www.jica.go.jp/jdr/activities/case\\_jdr/2003\\_01.html](https://www.jica.go.jp/jdr/activities/case_jdr/2003_01.html)  
(最終アクセス：2021年8月31日)
- 2) 厚生労働省：新型コロナウイルス感染症について  
[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000164708\\_00001.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000164708_00001.html)  
(最終アクセス：2021年8月31日)
- 3) 朝尾直介：重症呼吸器症候群（SARS）とカルロ・ウルバニ、神戸医療福祉大学紀要、21（1）、1-5、2020
- 4) AICU Associazione Italiana Carlo Urbani : <https://www.aicu.it/>
- 5) 日本放送協会（NHK）：NHK スペシャル“SARS と闘った男～医師ウルバニ27日間の記録～”、2004
- 6) NHK 報道局「カルロ・ウルバニ」取材班：世界を救った医師～SARS と闘い死んだカルロ・ウルバニの27日間～、虫明英樹、全205ページ、日本放送出版協会（NHK 出版）、東京、2004
- 7) World Health Organization (WHO) : WHO remembers Dr Carlo Urbani as a hero who fought SARS  
<https://www.who.int/news/item/28-03-2018-who-remembers-dr-carlo-urbani-as-a-hero-who-fought-sars>
- 8) World Health Organization (WHO) Global Alert, Global Response : Severe Acute Respiratory Syndrome (SARS) : WHO COMMUNICABLE DISEASES • SARS, 17 June 2003  
[https://www.who.int/csr/sars/conference/june\\_2003/materials/presentations/en/sarsglobal170603.pdf](https://www.who.int/csr/sars/conference/june_2003/materials/presentations/en/sarsglobal170603.pdf)
- 9) Akihiko KAWANA, Katsuji TERUYA, Nozomu YAMASHITA : Activity Report Japan Disaster Relief Expert Team 25 March 2003, 2003
- 10) 川名明彦、照屋勝治、山下望：重症急性呼吸器症候群（SARS ; Severe Acute

Respiratory Syndrome) に関する知見、  
感染症学雑誌、77 (5)、303-309、2003

- 11) 独立行政法人国際協力機構（JICA）：活  
動事例（国際緊急援助隊）、ベトナム・中  
国における SARS、謎の肺炎 SARS 制圧に  
専門家チームが取り組む

[https://www.jica.go.jp/jdr/activities/  
case\\_jdr/2003\\_01.html](https://www.jica.go.jp/jdr/activities/case_jdr/2003_01.html)

（最終アクセス：2021年8月31日）

- 12) World Health Organization（WHO）：  
SARS outbreak contained worldwide

[https://www.who.int/news/item/05-07-  
2003-sars-outbreak-contained-worldwide](https://www.who.int/news/item/05-07-2003-sars-outbreak-contained-worldwide)

（最終アクセス：2021年11月1日（修正加筆））

- 13) 竹林紀雄：テレビ・ドキュメンタリー  
は何を“描く”のか、文教大学大学院情  
報学研究科 IT News Letter、9 (2)、7-8、  
2013

- 14) ウィキペディア（Wikipedia）「放送文化  
基金」：

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%94%B  
E%E9%80%81%E6%96%87%E5%8C%96%  
E5%9F%BA%E9%87%91](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%94%BE%E9%80%81%E6%96%87%E5%8C%96%E5%9F%BA%E9%87%91)

（最終アクセス：2021年8月31日）

